各和金塚古墳

測量調査報告書

1981

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和55年８月１日から３月31日までに実施された、静岡県掛川市各和字金塚1892番地の１他に所在する各和金塚古墳の測量調査報告書である。
2. 測量調査は、昭和55年度文化財保存事業（金塚古墳発掘調査）として、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 調査は、静岡県文化財審議会委員斎藤忠博士・長田実氏の指導を得て、掛川市教育委員会の岩井克允、静岡県教育委員会文化課の平野吾郎・植松章八が担当して実施した。また、調査には、青野富士夫・渡辺康弘・岩井和志・松本芳親・野口英生の参加を得た。

   なお、静岡大学教授市原寿文氏からは種々の教示・助言を得た。
4. 本書の執筆は調査参加者が分担した。

   Ⅰ－１ …… 植松　章八

   Ⅰ－２、Ⅲ－３（Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐトレンチ・主体部）…… 渡辺　康弘

   Ⅱ …… 岩井　克允

   Ⅲ－１・２、Ⅳ …… 平野　吾郎

   Ⅲ－３（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌトレンチ）… 青野富士夫
5. 実測図・写真類の整理および挿図・図版の作製は、主に佐藤達雄・青野・渡辺があたった。
6. 本書の編集は平野・植松・岩井があたった。
7. 本調査および本書刊行に関する事務は、掛川市教育委員会があたった。

各 和 金 塚 古 墳

目　　次

例言

Ⅰ　調査の目的および経過 …… 1

1.　調査の目的とそれにいたる経過 …… 1

2.　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 5

Ⅲ　調査の内容 …… 6

1.　調査の方法 …… 6

2.　測量調査 …… 6

3.　トレンチ及び主体部の調査 …… 9

Aトレンチ …… 10

Bトレンチ …… 10

Cトレンチ …… 13

Dトレンチ …… 14

Eトレンチ …… 14

Fトレンチ …… 15

Gトレンチ …… 15

Hトレンチ …… 17

Iトレンチ …… 18

Jトレンチ …… 18

Kトレンチ …… 18

Lトレンチ …… 19

Mトレンチ …… 19

Nトレンチ …… 19

Oトレンチ …… 19

Pトレンチ …… 19

主体部 …… 20

Ⅳ　ま　と　め …… 22

挿　図　目　次

第1図　位置図（周辺古墳分布図）…… 3
第2図　周辺環境図 …… 4
第3図　墳　丘　図 …… 7
第4図　トレンチ実測図 …… 11
第5図　埴輪出土状態実測図 …… 16
第6図　主体部実測図 …… 21

図　版　目　次

図版　Ⅰ　　周辺環境（航空写真）
図版　Ⅱ　A　古墳遠景（東より）
　　B　〃　（西より）
図版　Ⅲ　A　墳　丘（後円部）
　　B　墳　丘（前方部より後円部）
図版　Ⅳ　A　墳　丘（前方部）
　　B　後円部　テラス
図版　Ⅴ　A　Bトレンチ
　　B　Cトレンチ
図版　Ⅵ　A　Fトレンチ
　　B　Gトレンチ
図版　Ⅶ　A　Jトレンチ
　　B　Kトレンチ
図版　Ⅷ　A　埴輪出土状態（Aトレンチ墳頂部）
　　B　〃　（Aトレンチテラス）
図版　Ⅸ　A　〃　（Cトレンチ墳頂部）
　　B　〃　（Gトレンチ墳頂部）
図版　Ⅹ　　主体部（北より）
図版　Ⅺ　A　主体部部分（北壁）
　　B　〃　（南壁）
図版　Ⅻ　A　主体部部分（西壁）
　　B　主体部完掘状態
図版　XIII　A　遺物出土状態
　　B　〃
図版　XIV　A　金塚1号墳
　　B　金塚2号墳

各 和 金 塚 古 墳

I. 調査の目的および経過

1. 調査の目的とそれに至る経過

和田岡古墳群とは、掛川市和田岡地区内に存する古墳群の総称で、北から吉岡大塚古篠（前方後円墳・全長55.0m）、春林院古墳（円墳）、行人塚古墳（円墳か？）、瓢塚古墳（前方後円墳・全長63.0m）、各和金塚古墳（前方後円墳）等を主力墳とする古墳群である。いずれも大型の古式古墳で　前方後円墳3基、円墳（？）2基が、南北約2kmほどの範囲に集中する状況で、遠江国東半部ではもっとも有力な古墳群の一つといい得る。ところが、昭和50年ごろまで、正式な調査によって資料が公有化されているのは春林院古墳のみで、他の各墳の内容はきわめて不明瞭であった。

こうしたなかで、掛川市教育委員会は、本古墳群の公的な保護施策を策定する目的で、その基礎資料を得るための測量調査等を実施してきた。一方、静岡県教育委員会も、県内における大型古墳の保護施策のための資料整理を進めてきた。こうした成果として、両者は本古墳群を県あるいは可能であれば国指定史跡として保護すべく方向がまとまり、文化庁にもその旨を伝えた。

掛川市教育委員会は、昭和53年度に瓢塚古墳の測量調査、昭和54年度に吉岡大塚古墳の測量調査を県教育委員会文化課の指導・応援をうけながら実施し、その成果を『瓢塚古墳』（1979）、『吉岡大塚古墳』（1980）としてまとめた。すると、基礎資料が未集積なのは、各和金塚古墳と行人塚ということになり、昭和55年度事業として、国および県の補助金をうけて、各和金塚古墳の測量調査を実施することにした。調査は、墳丘測量とトレンチ発掘調査を主体として、県教育委員会文化課の平野吾郎・植松章八、掛川市教育委員会の岩井克允が担当者となって実施した。

2. 調 査 の 経 過

本調査は、昭和55年8月1日に古墳全体の下草刈り作業を始めた。引き続きトレンチの設定・排土を行ない、葺石等の実測を昭和56年2月までに終了し、その後盗掘を受けていた主体部の清掃作業にはいり、同年3月31日をもって、すべての現地作業を終了した。以下簡単に調査の経過を述べることにする。

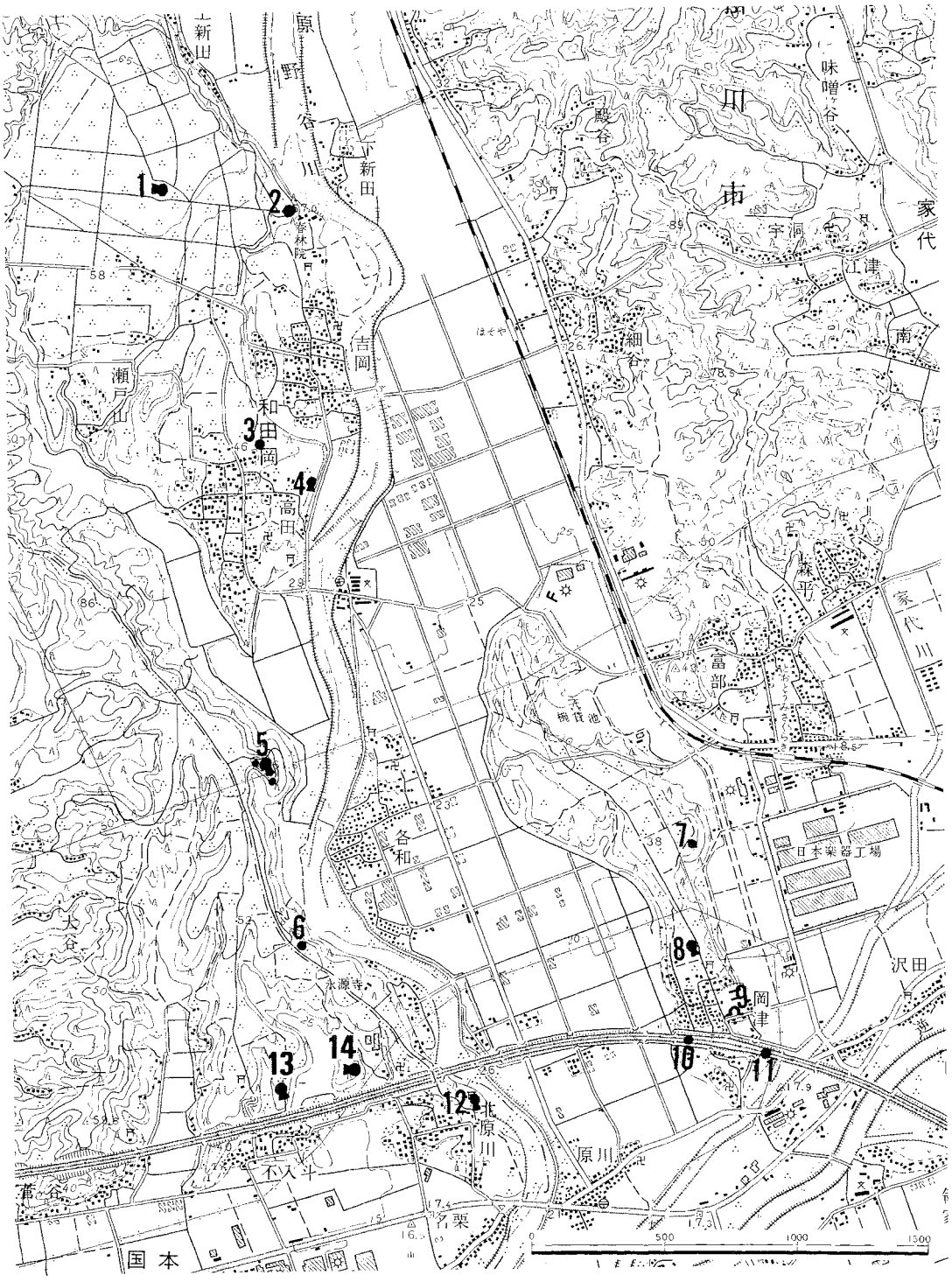
本墳の調査に着手したのは8月で、それは墳丘全体の下草刈りから始められた。あわせて、昭和52年度に実施された測量作業における基準杭を復元し、本調査におけるトレンチ設定のための杭の設定を完了した。これによって、蚊に悩まされながらも、ほぼ丘陵全域にわたる清掃が完了して、本墳はその均勢のとれた姿を表わしたのである。

墳丘確認のためのトレンチは、すべてで16本を設定したが、その作業は9月に入ってからであった。本トレンチ調査においては、発掘の後、段築状況の確認、作図・葺石平面実測・土層断面図の作成に加えて、埴輪列の検出と作図がその主な作業内容で、ほぼこの完了に2月までを要した。さらに、本墳前方部の前方と後円部北西側に存する小円墳の確認のための4本のトレンチと、本墳盛土部の確認のためのA・B・D・Kの各トレンチの切断作業は3月に入ってからであった。

3月には、主体部盗掘抗の清掃作業が主たるものであったが、その盗掘状況はかなり激しいものといえた。主体部の盗掘は昭和49年で、鉄製品・石製模造品等が盗掘抗の周辺から採取されて掛川市教育委員会に保管されているが、その際、円礫積みの竪穴式石室であることが推定されていることなどの経違から、本調査では関係諸機関と協議の結果、盗掘抗の清掃発掘を計画した。それは、盗掘抗埋土の搬出から始められたが、その埋土中にはかなりな鉄片類他が含まれている状況で、清掃作業によって、勾玉2点・石製模造品片数点分等を数えることができた。こうした調査の間、県文化財審議委員斉藤忠・長田実両氏にはたびかさなる現地指導を受けた。

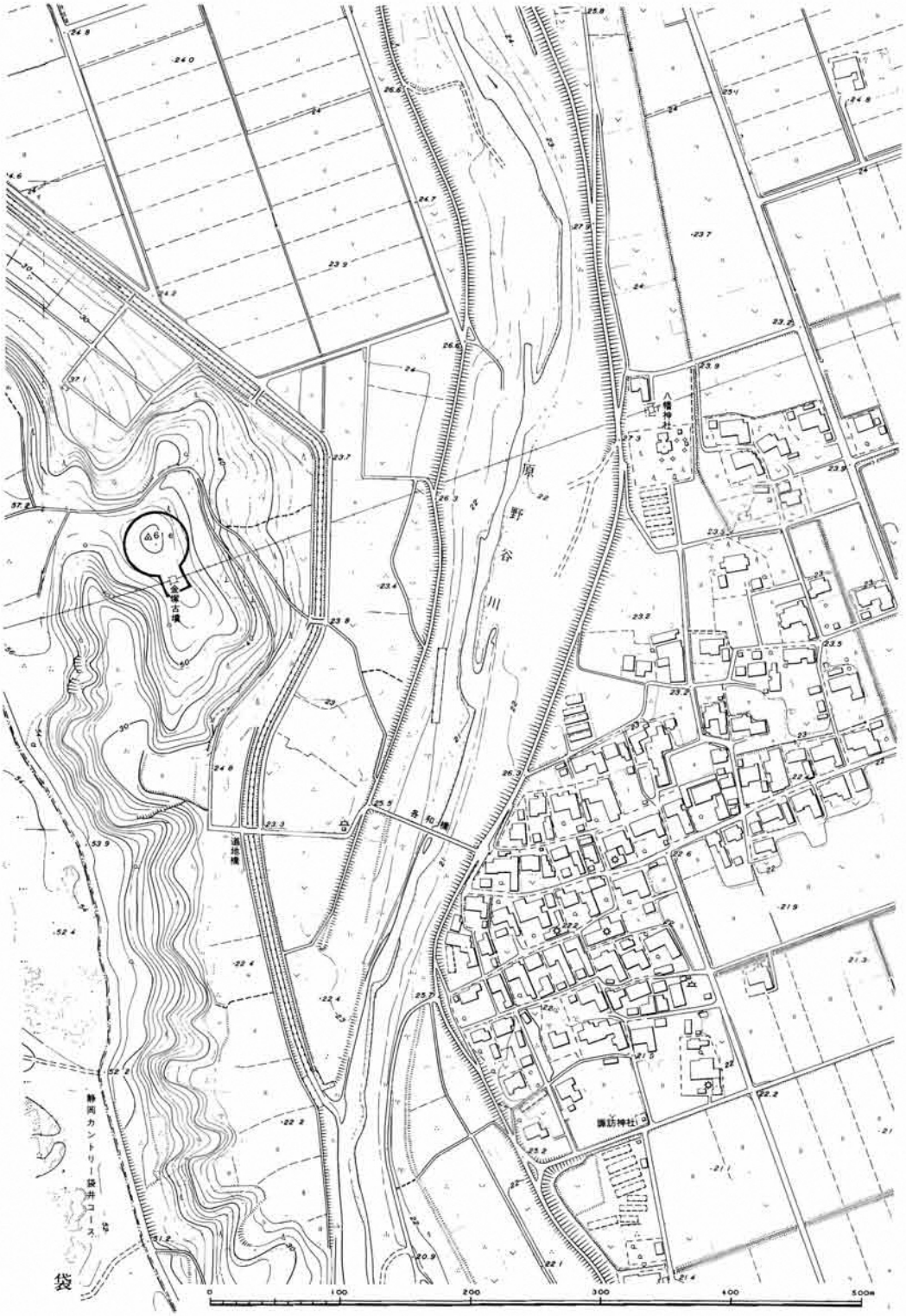
主体部の盗掘はかなり激しい状況であったが、それでも、石室の最奥部では天井石を含む良好な保存状況がみられ、床面上には10数本の鉄剣類を中心とする遺物が検出された。

この石室の実測測量とともに、各トレンチにおける埴輪列のとりあげを行い、各トレンチの埋め戻しを実施して本現地調査を完了した。



第1図　位置図（周辺古墳分布図）

1．吉岡大塚古墳　6．永源寺古墳　11．向山古墳群
2．春林院古墳　7．神明塚古墳　12．宇佐八幡1号墳
3．行人塚　8．奥ノ原古墳　13．浅間山古墳
4．瓢塚古墳　9．岡津横穴群　14．権現山古墳
5．各和金塚古墳　10．西岡津古墳



第2図　周辺環境図

Ⅱ. 位置と環境

金塚古墳は国鉄掛川駅で二俣線に乗り換え遠江桜木駅で下車し、西に向って2㎞ほど行った各和原台地から派生した尾根上に位置している。地籍は掛川市各和字金塚1892番地である。

古墳周辺の地形をみると、掛川市の北方、八高山の麓を源とする原野谷川が多くの解析谷や段丘を形成しながら南西へ流下し、本郷地区でその流れを南に変える。この附近から南の各和地区にかけて長さ5㎞、幅0.5～2.0㎞におよぶ沖野平野や段丘を形成している。なかでも右岸の吉岡原台地には標高50m～65mの上位段丘と標高46m～50mの中位段丘がみられる。また各和原台地にも標高52m～59mの段丘がみられる。金塚古墳はこの各和原台地から東へ派生した尾根を削平しあるいは盛土して築造している。

次に周辺の遺跡についてみると、原野谷川流域には縄文時代をはじめ各時代にわたる遺跡が多く分布している。このなかで古墳文化についてみると、とくに和田岡地区には原野谷川流域の首長墓とみられる大型の前方後円墳があることが知られている。金塚古墳から北方へ0.8㎞離れた高田地区の台地南端部には加茂神社古墳群（4基）がある。ここから100m北側の台地の東縁には大型の前方後円墳である瓢塚古墳がある。全長63m、後円部径38m、高さ5m、墳丘全体に葺石を持ち、埴輪を廻らした5世紀前半に位置づけられるものである。ここから北側0.5㎞離れた台地の縁からほぼなかほどのところに行人塚と10基ほどの小円墳が分布する。さらに北へ0.8㎞ほど離れた原野谷川を望む台地の縁には春林院古墳がある。埋葬施設が粘土槨であり、築造時期は古墳時代前期第Ⅲ期に位置づけられるといわれている。

この他吉岡原台地の上位段丘上の縁から0.5m離れた台地のなかほどには全長55m・後円径41.3m、後円部高7.2mの帆立貝型の前方後円墳である吉岡大塚古墳がある。後円部は2段築成で、幅1mの平坦面をもち墳丘全体に葺石を持ち、埴輪列が巡らされている。5世紀初頭から中頃までの古墳である。金塚古墳の南側の台地の縁には永源寺古墳さらに袋井市側には前方後円墳の宇佐八幡古墳、権現山古墳が点在し、また菅ケ谷横穴群がある。

原野谷左岸にも数多くの古墳や横穴が分布している。まず、本郷地区には長福寺古墳群、前城原古墳、宮坂古墳群、堂山古墳群などの円墳群や長福寺下横穴群、宮坂横穴群、古銭横穴群、楠ケ谷横穴群などの横穴群が分布している。南にくだって細谷地区には高代山古墳群、勤佐ケ谷横穴群がある。細谷地区の東側の稜線上には西ノ谷古墳群がある。高代山古墳群の南側の岡津原台地には神明塚古墳、岡津八幡神社古墳群などの円墳群と既に削平され墳形は不明であるが、半円方格帯神獣鏡が出土した奥ノ原古墳がある。岡津原台地の南隣附近には西岡津古墳、向山古墳群、岡津横穴群A群およびB群がある。

岡津原台地の南側逆川を沿った左岸の領家地区には押出古墳をはじめ大谷代横穴群、押出横穴群、十二ケ谷横穴群、金兵衛ケ谷横穴群、明千沢横穴群、城山横穴が所在する。また高御所地区には本村古墳、本村横穴群が分布している。さらに遡った下俣地区には山麓古墳群、大規模で、しかも単独で造られ、副葬品が多く、刳り抜き型石棺をもつ宇洞ケ谷横穴、直刀、鉄鏃など実戦

的武具を多数出土し、単独で造られている山麓山横穴が分布している。

Ⅲ　調査の内容

1.　調査の方法

古墳の規模・形状を理解するために墳丘測量および地形測量を実施し、さらに墳丘に何本かのトレンチを設定して埴輪・葺石等の存否および墳丘裾の確認をおこなうことにした。

測量調査のうち地形測量は古墳が独立丘に近い細い丘稜上に築かれていること、又墳丘の東側および北側を中心に、丘稜にかなり手を加え、盛土でなく削り出した部分が多いものであることが理解されたので、古墳の周辺を含め広い範囲の測量が必要であると思われた。しかし、掛川市教育委員会が昭和52年度に実施した金塚古墳の周辺のかなり広範囲にわたる実測図が存在するので（註）今回改ためて地形測量をおこなわず、先の実測図を基本にし必要な部分を補足することにした。地形測量図は１：100の縮尺でおこなわれており、等高線も50㎝間隔で測量・図化してあった。

墳丘測量も先に作成した測量図を基本に、必要に応じて補足してゆくことにし、墳頂部あるいは墳丘末端に不明確な部分があるので、トレンチ調査による成果を補いながら、測量図を完成させることにした。幸い墳丘上に先の測量時に設定してあった杭が保存してあるので、それを基点に測点を復元あるいは新たに設定することにした。後円部及び前方部の墳頂部における平坦面あるいは現状での墳丘末端の位置を記入すると共に、特に後円部墳丘の中段にあるテラスの位置を平板測量により補足した。続いて墳丘に設定された墳丘末端あるいは円筒埴輪等の位置を記入した。又隣接して存在する金塚２号・３号墳も前方後円墳と同一の図面に納めることとし、測点を延長すると共に同一のスケールを実測をおこなった。

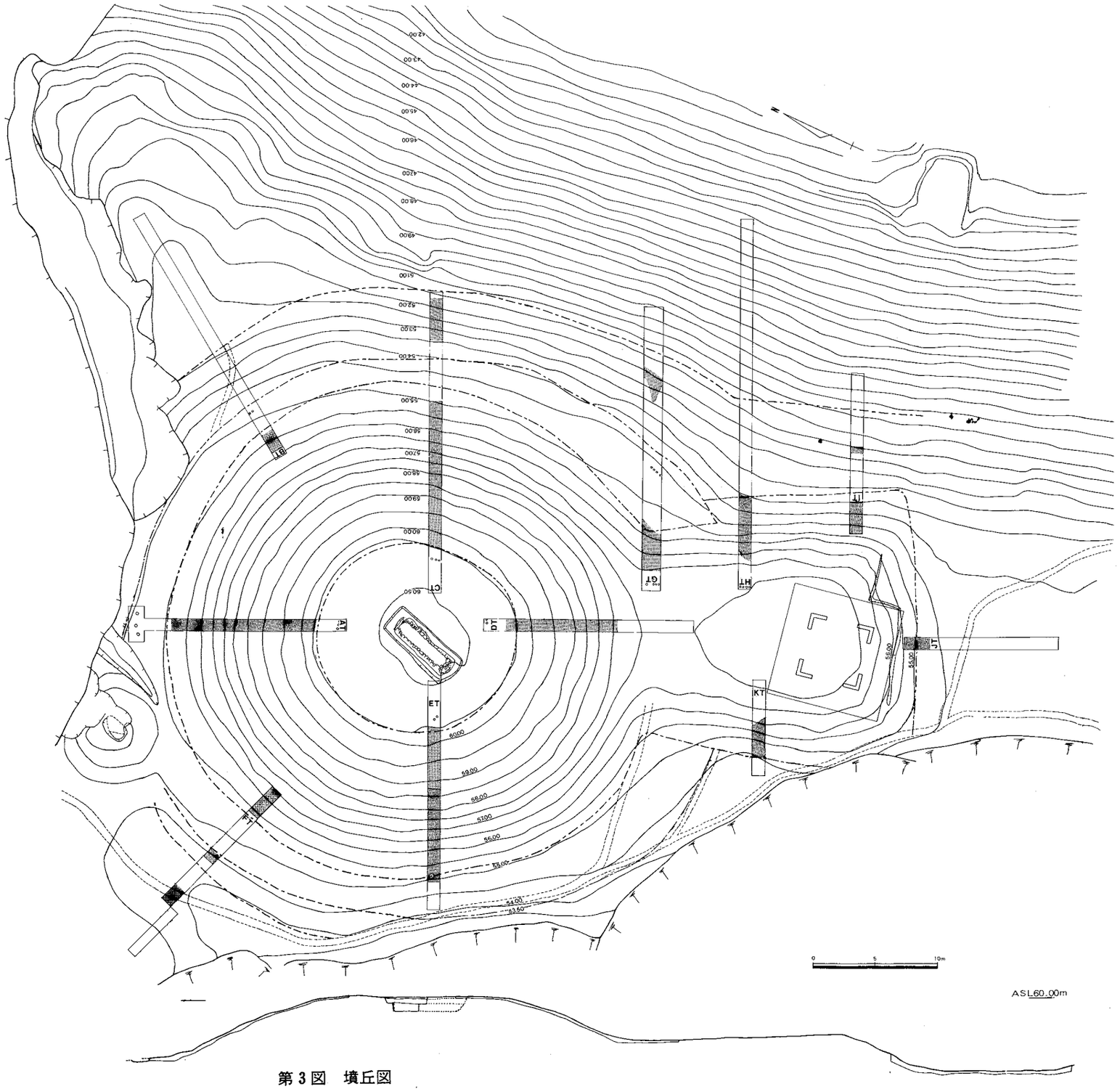
測量調査に併行し金塚古墳に11本のトレンチを設定し、それぞれＡ～Ｋまで順に命名した。又２号墳にも３本（Ｍ・Ｏ・Ｐ）のトレンチを設定した。各トレンチの位置は第３図に示すとおりであるが、前方後円墳の主軸方向に沿ってトレンチを設定し、これに直交するように何本かのトレンチを設定した。

各トレンチは葺石・墳丘末端の状態および埴輪の存在を確認することを主たる目的にし、発掘は葺石を検出するところまでに止め、１部を除いて墳丘に切り込むことはしなかった。

本古墳の主体部は昭和49年に盗掘がおこなわれ、多量の鉄製品が周辺に散乱した状態で発見されたことがあり、応急に埋戻しをおこなっている。従って遺物のかなりの部分は採集されているが、１部は埋戻されているものと予測されること（事実今回の調査により埋土中から多量の鉄製品の残欠出土した）あるいは主体部の構造・規模等が不明確であること等により関係機関の協議により、今回の調査で主体部の盗掘坑を清掃発掘と、その構造・規模等を確認することにした。

2.　測量調査

金塚古墳は各和原の台地より派生した細い丘稜上に築かれたもので、北西の一部を除いて他は


ASL60.00m
0
5
10m
AT
BT
CT
DT
ET
FT
GT
HT
IT
JT
KT
42.00
43.00
44.00
45.00
46.00
47.00
48.00
49.00
51.00
52.00
53.00
54.00
55.00
56.00
57.00
58.00
59.00
60.00
60.50
55.00
54.00
53.50

第3図　墳丘図

急傾斜面を成しており、あたかも独立丘の如き景観を呈している。古墳はそうした丘稜の高まりを利用し、周囲の地形を削り出し、さらに1部に盛土して墳丘を築いているもので、幾分北から南に傾斜している地形に従いほぼ東南方向に前方部を向けて造られている。

墳丘測量はすでに述べたように昭和52年度に作成した測量図を基本にし、それに補足をおこなった。100の1縮尺・50㎝間隔の等高線を基本とし、部分的には25㎝の補助線を加えた。墳頂部は海抜60.5ｍの等高線が巡っているが、ほぼ正円を成している。墳丘裾部は一見すると海抜55ｍあるいは54.5ｍの等高線の巡る位置を基盤に築かれているように見えるが、調査の結果この部分もかなり地山に手を加え削り出したもので、墳丘の端部はさらに下方の海抜52.5ｍの等高線に近いものであること、従って従来古墳端部と考えられた部分は後円部中段のテラスであることが理解できた。さらに盛土と地山を削り出した部分の境界は後円部後方に設定したＡトレンチの観察によれば、海抜58.0ｍの位置付近と考えることが出来る。

金塚古墳の前方後円墳としての築造規画あるいは設計の存在は当然考慮されなければならない。現在資料の整理が十分でなく、詳細は未検討であるが、築造規画はその占地した地形あるいは立地上の制約により多少なりとも影響を受けていることが予測される。例えば墳頂部の中心から東側の墳丘末端までの距離を後円部半径として円を画くと、後円部の径は丘稜の横幅より大きくなっている可能性が強い。このような立地上の制約が、古墳築造上かなりの無理をもたらしており、それが古墳の姿に反映している。それらは①墳丘は後円部のみが2段築成で、中段のテラスは後円部のみに巡っており、前方部では明確でない。従って外見上の墳丘末端が明確でないことと併せ、前方部裾は後円部に比較し、1段下っているかの印象を与えている。あるいは②墳丘の東・西の裾あるいは前方部末端の裾の位置が一致しないこと等の変則をもたらしており、さらに③外見に比較し、測量図で検討すると、後円部の径に比較し、前方部が非常に短いこと等が理解できる。これはあるいは地形の制約の中で、前方後円墳としての築造規格を満すための努力が払われた結果かも知れない。

墳丘測量およびトレンチ調査の結果古墳の規模は

全　　長	66.4 ｍ		
後円部径	61.2 ｍ	前方部幅	20.5 ｍ
後円部高さ	6.5 ｍ	前方部高さ	4.0 ｍ

であることが理解できた。後円部の墳頂は径15.5ｍの範囲に平坦面を成しており、その区域は葺石はなく、外側に円筒埴輪列を巡らしている。又前方部も鉄塔の建設で1部変形している部分もあるが、先端幅9.5ｍ、後円部寄りで幅6.0ｍ程の平坦を形成している。後円部は2段築成であり、墳丘中段に幅2ｍ程のテラスが巡っている。又前方部も2段築成である可能性があり、幅2ｍ程のテラスの存在を推測し得るが、墳丘の崩れがあり明確でない。今後の検討が必である。

3. トレンチ調査

本墳においては、墳丘及び周濠の状況を把握するために、トレンチ発掘調査を実施した。トレ

ンチ名はアルファベットのAからPまでを付し、合計16本を数える。古墳の全長を考慮に入れA・D・Jの各トレンチは長軸方位で設定し、他に前方部・後円部の規格性の把握、周濠及び周辺小古墳と本墳との関係等を考慮に入れた東西のトレンチがそれぞれの各位置に設定されている。

Aトレンチ

後円部北側で、ほぼ長軸方位に設定された長さ17.3 m・巾1 mのトレンチで、墳丘中段にあたるテラス付近に東西各1 mの拡張区を有している。

中段裾部は上端より、13.8 mの地点に観察されるが、その上部の墳丘側には、墳丘上部の基準点より9 m以降より裾部にかけて、ほぼ全面の葺石が認められる。中段平坦面は裾部より4 m前後を認め得るが、和田岡地区より袋井市側のゴルフ場に至る小径により、平坦面より周濠部に至る部分が削平されており、確定的な数値は得られなかった。

中段位の裾石は大きめの人頭大礫を横位に並列し、これはそれぞれのトレンチにおいても同様であるため基本的にはこの人頭大礫が裾部全体の支えの石として使用されているとみることができる。

Aトレンチにおいては各トレンチ同様、礫の長軸を墳丘の傾斜に直交する方向で墳頂に向かう直線上に帯状の石列が確認されるが、他のトレンチ程顕著ではなく、墳丘の傾斜に対して直交する石列は僅かに中段位の葺石の上部1 m弱に認められる程度である。しかし微細に観察するとその石列の上部には斜めに葺かれた石列を部分的に確認でき、それらの石列の間に横位に並べられた葺石の列をも確認し得るようにも思われる。これらの石列と横位の葺石との関連性については、他のトレンチに類例があまり認められないが、墳丘全体に亘り、帯状の石列の間に等間隔に意識的に小さな斜状の石列を置いていることも考えられる。

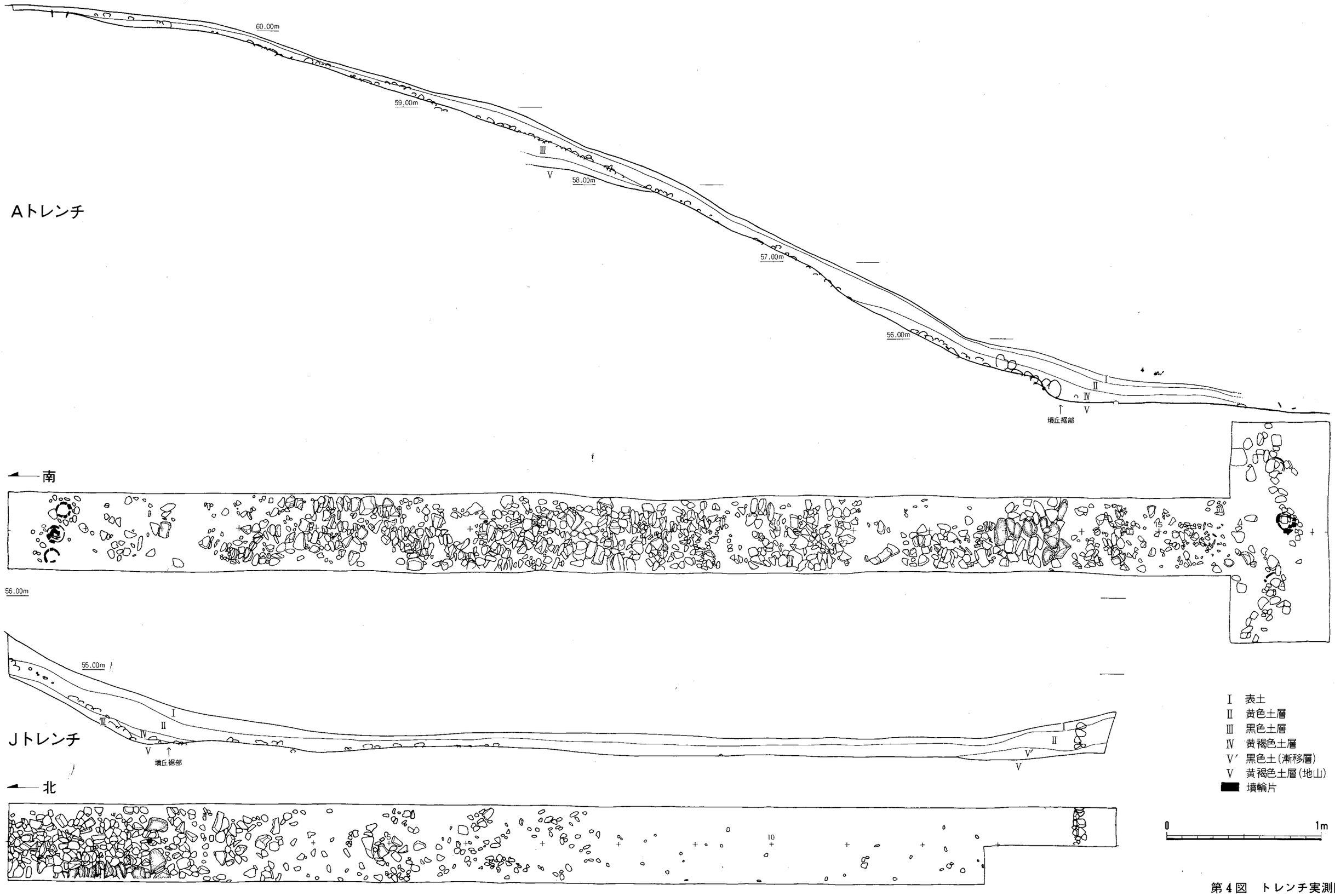
土層観察によれば、第Ⅰ層が表土層で、ほぼ全体に10㎝前後の厚さを測り、第Ⅱ層が暗褐色土層で20～30㎝前後、第Ⅲ層が若干砂質の横褐色土層で10～20㎝前後であるが、基本的にはこの第Ⅲ層が墳丘の盛土を形成していると認められた。第Ⅳ層とした軟質の黒色土層は殆んどが中段乃至下段における裾部を中心とした範囲に顕著に観察された腐植土層で、いわゆる流入土とみられた。

墳丘盛土の観察のため、基準点から13m～15mの地点でトレンチの一部を掘り下げたところ、葺石の下部より第Ⅲ層の黄褐色土層が10～20㎝程堆積し、その下部に旧表土とも思われる黒色土の層が10㎝程認められた。さらにⅤ層とした墳丘盛土より若干明かるい黄褐色土層がこれに続くが、このⅤ層が本墳の基盤をなす地山と認められた。

尚、各トレンチと同様にAトレンチにおいても墳頂部に3点、中段平坦部に3点の埴輪列がそれぞれ認められる。

Bトレンチ

後円部の北東側で長軸方位に対しほぼ45度に設定されたトレンチである。長さ22.2 m・巾1 mで墳丘中位の平坦面から周濠外堤の数m外側までを含んでいる。


Aトレンチ
60.00m
59.00m
58.00m
57.00m
56.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
墳丘裾部
南
56.00m
55.00m
Jトレンチ
墳丘裾部
北
Ⅴ′
10
Ⅰ 表土
Ⅱ 黄色土層
Ⅲ 黒色土層
Ⅳ 黄褐色土層
Ⅴ′ 黒色土(漸移層)
Ⅴ 黄褐色土層(地山)
墳輪片
0
1m

第4図　トレンチ実測図

裾部は上端より2.2 m付近と観察され、又下段裾部は9.35 m付近とみられた。

上端より0.5 m付近より中段裾部にかけて帯状の石列が認められるが、石礫は横長の人頭大礫を横位に置いている。又現況より上部は多少の撹乱をうけ、もとより無かったとも人為的に除去されたとも思え、何れの可能性も残る状況であった。葺石の多くは掌大であるが中段裾部において帯状の石列の最下部の石と同様に横位に同等の石が並べられ、支えとされていた。

中段位の裾部（上端より2.2 m付近）より、5 m付近までの約2.8 m程が中段の平坦部であるが、4.3 m付近に埴輪列が認められる。4 m付近より5 m付近は若干下段に続く緩やかな傾斜を有するが、その肩の先端部に埴輪列があるとみることもできる。その5 m付近より9 m付近まで下段部の墳丘の傾斜が続き、9.35 mの地点に下段部の裾を求めることができる。裾石はやはり大きめの人頭大礫が用いられているが、下段部の葺石は若干粗雑で礫も小さく、全体に石が少量であった。

下段裾部より14m付近までの中約4.65 m程が周濠とみられ、15m地点で周濠の上端を認め、18m付近までの巾約3 m程を周庭帯とみることができる。周濠内の底面全域に及び、礫群がみられるが、これは地山礫の露呈とみられた。以下18m以降は緩斜面が続くが、トレンチ外の現況は開墾等により地形変形されている可能性があり周濠より周庭帯に関する断定的な数値は摑み得ない状況であった。

土層観察については基本的にはAトレンチには順ずるが、Ⅳ層とした黒色の有機質土層は、下段の裾部では検出されず、流入土が本トレンチの周濠内に若干見られる程度であったことを付記する。

中段平坦面にAトレンチと同様埴輪列が認められるが、それは中段裾部より2.6 mのやはり下段に下がる肩部の位置にあり、基本的にはこの位置に墳丘の周囲を埴輪が廻ると考えられる。Bトレンチにおいては埴輪の点数は2点であった。

Cトレンチ

後円部の東側に長軸に法して90度に設定されたトレンチで、長さ23m・巾1 mである。

上段の葺石は基準点より7 m付近より葺かれているが、上部では挙大の礫が散漫にみられる程度であり若干微密性に欠ける感がある。

基準点より11m付近から中段裾部の18.3 m程までにには密な積石が葺かれ、ほぼ基本的な墳丘上部の石積みが把握できる。帯状の石列もほぼ同じ11m付近よりトレンチの北側寄りに裾部まで積まれていることが判るが、石はほとんどが人頭大で横位に積まれているのはBトレンチとほぼ同様の状況である。中段裾部の裾石も同様にやや大きめの人頭大礫を横位に配置し葺石の支えとしている。裾石の18.3 m付近より19.3 m程までに掌大を主とする石礫が多くみられたが、これらの転落石の可能性もありその意味については不明であった。

中段裾部より20.5 mまでを中段平坦面と理解したが、下段に移る傾斜の肩部、即ち20m付近に埴輪列を認め得ず、僅かに埴輪片を確認したにすぎなかった。これはCトレンチにおいてのみ

中段平坦面がそのまま下段に傾斜していく状況を呈し、平坦面の肩の部分が撹乱により損失し、埴輪とも失われた可能性があると考えられた。

墳頂部の埴輪列は残存し径20㎝余の埴輪4点（内1点は径の半分のみ）を確認し得た。埴輪は各トレンチとも殆んど根の部分のみの残存状況である。

下段部は26.5ｍの地点でやや小さめの人頭大礫4点が縦位に葺かれており裾部と確認し得た。23.5ｍ付近より葺石が認められるが、全体に上段と異なりやや雑な石積みの状況であった。礫は殆んが拳大～掌大であるが25ｍ～26ｍ付近1ｍ余にトレンチ南端にやや小さめの人頭大礫5点が半分程露呈しており、一応帯状の石列と認め得る状況を呈していた。

基本的な土層は他トレンチと同様であるがⅣ層の黒色有機質土層が上下段裾部の他、上段13.5ｍ～16.5ｍの3ｍ程に亘り確認されている。墳丘の傾斜により裾部他周濠等の流入土の堆積を考える時、上段の黒色土の堆積はＣトレンチの墳丘上部における若干の傾斜の落ち込みを理解し得るものであろう。

Ｄトレンチ

後円部墳頂より前方部墳頂にかけ、Ａトレンチとは逆に長軸に沿って設定された長さ18ｍ、巾1ｍのトレンチである。

基準点より5.5ｍ地点、標高60.0ｍの付近より、葺石の石積みがみられることは他トレンチと同様である。帯状の石列は10.5ｍ付近より裾部15ｍ付近までにみられ、他トレンチと同様に横長の人頭大礫を横位に積み、縦列としている。石列の上端は撹乱を受け、縦列の連続性を断定し難いが、一応10.5ｍ付近で墳丘のマウンドの傾斜が交換しているともみられ、何れにしても石列の上端はこの辺りに求めてよいものと思われる。裾石は若干丸味を帯びた人頭大礫4個を並列しており他の葺石は殆んどが掌大である。埴輪列のある5.5ｍ付近より8ｍ付近までは若干石積みが散漫であるのはＣトレンチと同様の状況であった。

又本トレンチでは裾部より前方部墳頂に至る2ｍ程に若干の周濠状の凹部がみられ、掌大を主体にした礫を底面に敷きつめた状況がみられる。その周濠状内の遺構の西端に高さ15㎝前後、径10㎝程の縦石の列がみられ特筆される。

埴輪は墳頂部において確認された2点のみであるがそれらの西半分は撹乱をうけていたため本来は3点が、本トレンチにおいて確認され得る状況にあったのではないかと思われた。

土層に関しては基本的には他トレンチと同様でありⅣ層の黒色土は裾部において、最大25㎝を測った。

Ｅトレンチ

後円部西側に設定されたＣトレンチとは逆向きに、長軸方向とは90度の向きに設定されたトレンチで、長さ15.8ｍ、巾1ｍである。

墳丘部の礫群の中では上端より3ｍ付近の長さ1ｍ程の帯状の石列の他10.5ｍ付近の1ｍ程

の長さの石列が帯状と認め得るもので、やゝ小さめの人頭大礫を横位に積み縦列石としている。

上端より5.5 m付近より葺石が積まれているが、9.5 m付近より密に積まれている。礫は殆んどが拳大から掌大である。

上端より12.5 m付近より13.5 mの1 m範囲内に大きめの人頭大礫が積まれ、12.5 m付近では大きめの横長礫を横位に積み13 mでは平石もしくは縦長の礫を並列し、又13.5 m付近では基本的には縦長の人頭大礫を並列して積んでいる。そのため裾部は以上3箇所の何れかに求め得るが現状では最部の基準点より20.1 mを裾部とみたい。

裾部より2.2 m程で本トレンの発掘区が終結するため中段平坦面についてはその概要を明確にすることは出来得ず、従って埴輪列の検討も出来得なかった。上段の埴輪列についてはトレンチの南寄りに1点を確認し、若干の埴輪片をほぼトレンチの中央の10～20 cm程下がった地点で確認するに止まった。

土層についてはⅠ層の表土層が10～15 cm、Ⅱ層の暗褐色土層が15～20 cmの厚さであり、その下部はⅢ層の黄褐色土層であり、Eトレンチにおける中段裾部の第4層黒色土層は検出されなかった。

Fトレンチ

後円部の北西側で長軸に対しほぼ45度に設定され、Bトレンチと対比する位置を有するトレンチである。長さ17.4 m、巾1 mで墳丘中段上部より周濠乃至周庭帯の1部を含んでいる。

裾部は上端より2.4 mとみられ、下段裾部は8 mの地点に求められた。

上端より裾部にかけて密な葺石が積まれ、裾石は大きめの人頭大礫が若干の孤を有して積まれている。裾石の下部には1 m程に巨り礫が散漫に露呈しているが、転落石か或いはDトレンチのように礫敷の意味を有するものかは不明である。裾部より2.6 m、即ち上端より5 mまでを中段平坦面と解したが5 m付近における埴輪列は本トレンチにおいては確認されていない。上端より8 mの下段裾部にもやはり大きめの人頭大礫を横位に3個を並列して置いている。

上端より13.5 mまでに周濠の下端を求めるとその範囲は5.5 m程になりBトレンチより若干の広がりを有している。周濠内には人頭大の平石が点在するが地山礫層の一部ともみられた。

周濠外縁の下端より周庭帯に至る傾斜の2 m程に拳大から掌大の石礫が露呈しているが葺石とみるには多少散漫で、むしろ地山礫層の一部とみなされるようであった。

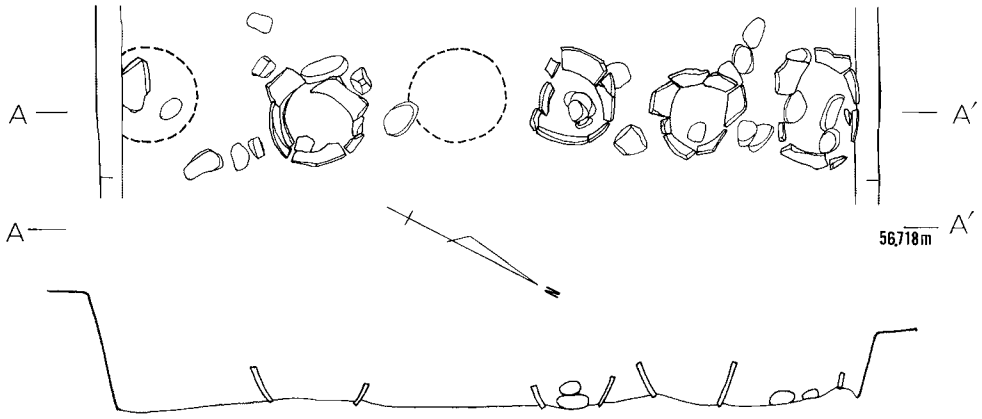
土層はⅠ層、Ⅱ層は他のトレンチと同様であるがⅣ層が中段平坦部の他に下段の裾より周濠全域に亘り厚さ10～20 cmを測った。

Gトレンチ

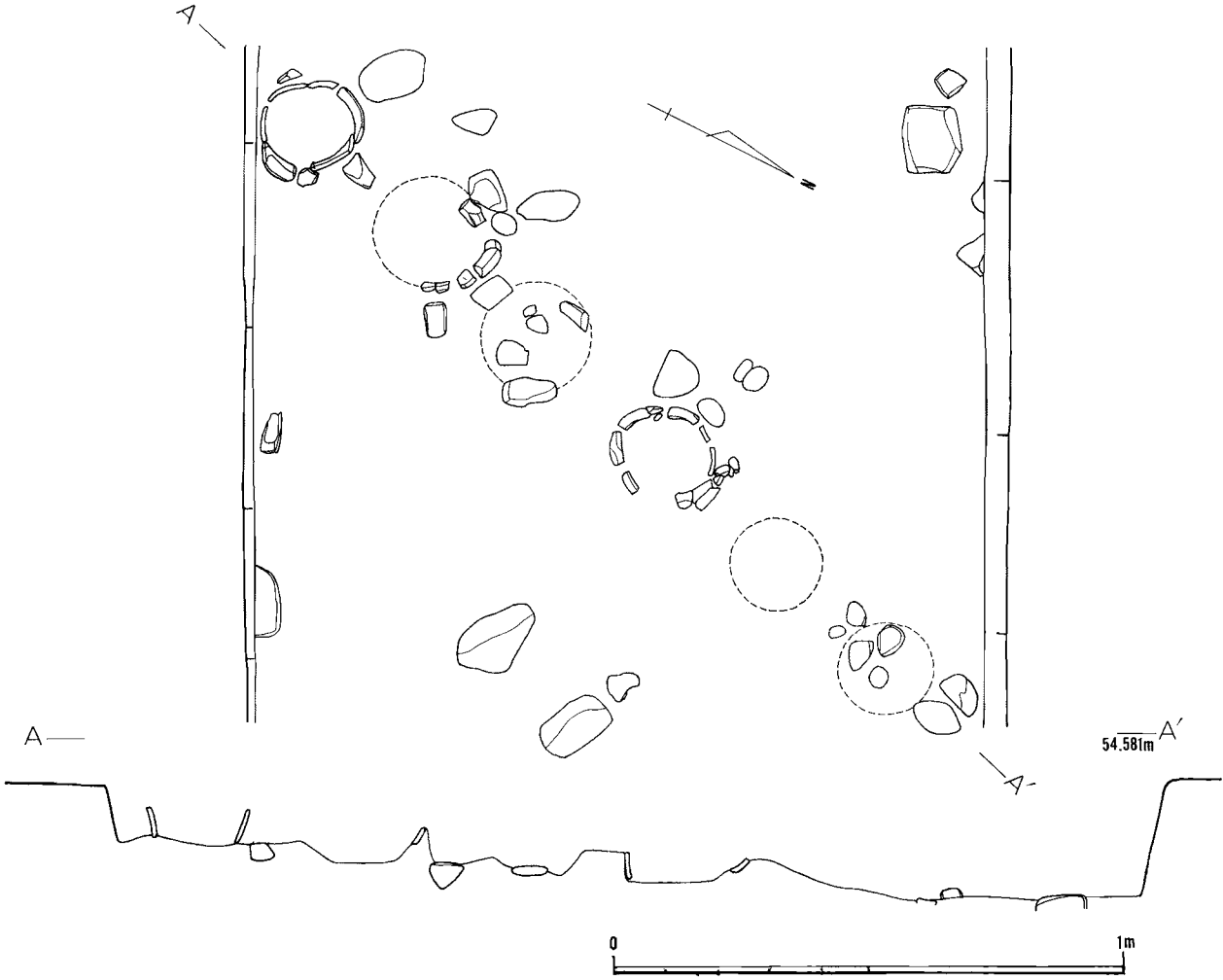
前方部東側に設けられた3本のトレンチのうち後方のもので、いわゆる〝くびれ〟部付近にあたる。長さ22.7 m、巾1 mで、上端より5 mに裾部を有し下段平坦部までを含んでいる。

上端よりほぼ2 m付近より裾部まで密に葺石が敷きつめられているが、やゝ人頭大の葺石が目

Gトレンチ墳頂部埴輪出土状態



Gトレンチ中段平坦部埴輪出土状態



第5図　埴輪出土状態実測図

立つことが注目される。基本的には拳大から掌大の葺石により埋められているが、トレンチの上端に向かって左寄りに人頭大の石列が横位に敷かれ帯状に縦列していることが確認できる。

裾部の葺石は人頭大礫2～3段を横位に並列して墳丘裾部を表現しているが、礫の配列は一応コンターに添うものと認められて、くびれ部ないしはそれに近いあり方を呈する可能性は指摘できよう。

本トレンチにおいてもFトレンチ同様に裾石より中段平坦部の一部にかけて拳大から掌大の石礫が点在し、転落石か或いは礫敷の意味を有するものか考察し難いものであるが、各トレンチを総合して以後の検討を待ちたい。

下段部の裾石は上段の裾石と平行してほぼ斜めに葺かれ、礫は殆んどが人頭大礫であるが中央の礫はほぼ人頭大礫の2倍を有し注目される。下段の葺石は上段に比して微密さに欠けるが多くは拳大の礫であることは共通している。下段部の帯状の石列は二本が確認されるがそれぞれが後円部の墳頂方向に向かって斜行状に積まれていることが注目される。上段の石列は周辺の礫より若干大きめの石が下段に行くに従って人頭大に近くなり、一見不明瞭ではあるが帯状と識れる。下段の帯状石列はほぼ4点ほどの人頭大礫であり、明らかに石列と確認し得る状況を呈している。

埴輪列は前方部墳頂側の上段に4点出土し、うち上端に向かって右寄りの埴輪は他の3点と40㎝程の間隔を有しているため、間に左右1点づつの埴輪が存していた可能性が残る。下段の埴輪は後円部のコンターと平行して並べられたかの如くほぼ斜状に4点が出土している。これらの埴輪列も上端に向かって右寄りの埴輪の出土を考えたが、現場の確証は得られなかった。

土層に関しては第4層が厚く堆積し、中段の裾部では最大40㎝を測り、尚下段の上部の帯状石列の部分と裾部においても20～25㎝の堆積をみた。

下段平坦部については裾部より2mを観ることができるが裾部より若干傾斜を持っているため数値は漸定的である。

Hトレンチ

前方部東側に設けられたトレンチ3本のうち中央のもので、長さ28.5m、巾1mである。

上端より2.5m～3mの範囲に1列と3.5m～4mに1列の短めの帯状の石列を有し、4.5m付近より7.3mの裾部までは他トレンチと同様の石列がみられる。最上段の短めのトレンチ付近では墳丘の傾斜が若干変わる所謂変曲点の意味合いがあり、帯状の石列がそれとの関連性を有すものともみてとれる。唯石列間の葺石が散漫で多少撹乱の状態であるため確証を得難い。

葺石は拳大から掌大であるが、やや他トレンチに比して積石の状態が粗である。裾石に至る長めの石列はここでも人頭大礫を横位に積んでおり、上端より6.5mから7.3m程に裾石を2段程に配している。裾石は帯状の石列よりやや大きめの人頭大礫である。

中段平坦面は裾部より2.7㎝程を把え、後は緩斜面であるが自然地形と下段裾との変曲点が把え難く不明瞭であった。

埴輪は墳頂部に3点出土し、上端に向かって右寄りにも埴輪片が出土しているため基本的には

本トレンチ内では4点が並列していたとみられる。

土層観察については第Ⅰ層が5～10㎝前後で、第Ⅱ層が10～20㎝前後、トレンチ下半部の葺石面から裾部にかけては黒色有機質土層（Ⅳ層）が20㎝前後堆積していた。

Ⅰトレンチ

前方部東側に設けられた3本のトレンチのうち最も前方にあるトレンチで長さ12.8ｍ、巾1ｍである。

上端より2.5ｍが裾部で、その上部には挙大礫を主として葺石が密に積まれている。帯状の石列はやや小さめの人頭大礫を横位に積んでいるが、やや他礫と比して同等か多少大きめの石礫のため若干把えにくい状態である。

裾石は人頭大の礫を並べているがここでは横位縦位の基本形は守られてはいない。

下段の裾部は上端より6.8ｍの地点であるが人頭大の礫が縦に2個配置されているのみであり、他の葺石は全く見られない状態である。

上端より9ｍ付近に墳丘の変曲点を求め得るとすれば下段平坦部は2.2ｍ余であるが、人為的平坦面と自然地形との境は現地におけるトレンチ内では不明瞭といわざるをえない状態である。

土層観察については他トレンチと同様であるが、黒色有機質土層（Ⅴ層）が下段裾より本トレンチ発掘区外まで続いており、20～25㎝前後を測った。

Ｊトレンチ

前方部先端の中央部に設定されたトレンチで長さ14.5ｍ・巾1ｍを測り、末端は金塚古墳の南側の1号墳と命名した古墳の裾に及んでいる。

裾部は上端より2.1ｍの地点に求められるが、その上部葺石は挙大から掌大の礫が殆んどでやや粗雑に敷かれている。上端に向かって左寄りのトレンチ発掘区境にかかる程の位置にやや大きめの掌大の石列が並ぶが、他トレンチの帯状のそれに比して小さめである。裾石は大きめの人頭大礫を3個程使用しているが、Ⅰトレンチと同様に縦横位の約束は守られていない。

上端より4.5ｍ付近までをやや浅い溝状と観察することができるが、その底面にはＦトレンチにみるようにかなり粗雑に石礫　敷かれており、地山礫層の一部ともみられる。上端より3.8ｍから4.7ｍ付近までの1ｍ弱の範囲に特に礫の残存が悪く多少撹乱をうけているようにも思えた。

土層観察については、第Ⅰ層が15～20㎝を測り、Ⅱ層が最大40㎝、Ⅲ層が20㎝、Ⅳ層が10㎝余を測った。

Ｋトレンチ

前方部西側に設定された長さ8.3ｍ・巾1ｍのトレンチである。

裾部は上端より6.2ｍの地点であり、上端より3ｍ付近から葺石が始まる。礫は全体に小さくなり挙大礫が顕著である。上端に向かって左寄り3.5ｍ付近より4.5ｍ付近に帯状の石列とも見るこ

とが出来る横位の石積みが確認されるが他の葺石と比して殆んどその大きさに大差はなく、何れとも断定し難い。

裾部は２つの大石を使用し、向かって左側が横35㎝、縦20㎝、右側が横45㎝、縦23㎝を測った。これは全トレンチ中で最大と思われる。裾部からトレンチ末端までは平坦部であるが、そのまま以下は自然地形の谷へと下降するため中段平坦面の確定的な数値は得られなかった。

本トレンチでは盛土と地山の境目の土層観察のためトレンチを切断したが、その結果上端より2.7ｍの地点で第Ⅲ層の黄褐色土層と墳丘盛土である礫混じりの褐色土層との分岐点が得られ、盛土の褐色土層の下部に旧表土とみられる黒色土層が35㎝程の厚さで堆積し、10㎝程の暗褐色土の漸移層がその下層に続いた後地山である赤褐色ロームの層に続くことが判明した。

Ｌトレンチ

前方部東側に３本設けられたそのさらに南側に設けられたトレンチで長さ11.5ｍ・巾１ｍである。

本トレンチでは基本的には墳丘に葺かれた石積みの範囲は殆んど確認出来ず、僅かに上端より7.5ｍから８ｍにかけての巾50㎝前後の石礫と16ｍから 10.4ｍ付近の40㎝前後の石礫群がそれと対称し得る状況を呈するに止まっている。それらの礫は挙大を主体とし極めて雑で明確な支えとなる裾石も断定出来得なかった。墳丘の傾斜自体も全体に援斜面のスロープが続き、変曲点とされる確証も得られない状態であった。

土層についても基本的な第Ⅰ層から第Ⅲ層までで、第Ⅳ層の黒色土の堆積はみられなかった。

Ｍトレンチ

１号墳の南側斜面に巾0.5ｍ、長さ３ｍの本トレンチを設定し、１号墳の規模を把握することにした。その結果、１号墳の裾と認められる段差を検出し、墳丘上より須恵器破片の出土をみている。

Ｎトレンチ

２号墳の南側斜面に巾0.5ｍ・長さ２ｍの本トレンチを設定し、２号墳の規模と金塚古墳との関係を調べた。その結果、２号墳の周溝が金塚古墳のテラスを掘削して築かれており、２号墳墳丘盛土の下に黒色腐植土層が観察できたことから、２号墳がより新しいことが判明した。

Ｏトレンチ

１号墳西側斜面に巾0.5ｍ・長さ2.6ｍの本トレンチを設定し、１号墳の規模と墳形の確認に努めた。その結果、１号墳裾と思われる若干の段差を認めたが、周溝等の確認はできなかった。

Ｐトレンチ

１号墳の南西平坦部に巾0.5ｍ・長さ２ｍのトレンチを等高線に沿うように設定し、１号墳の

墳形及び規模をつかもうとしたが、遺構は検出されなかった。

主体部

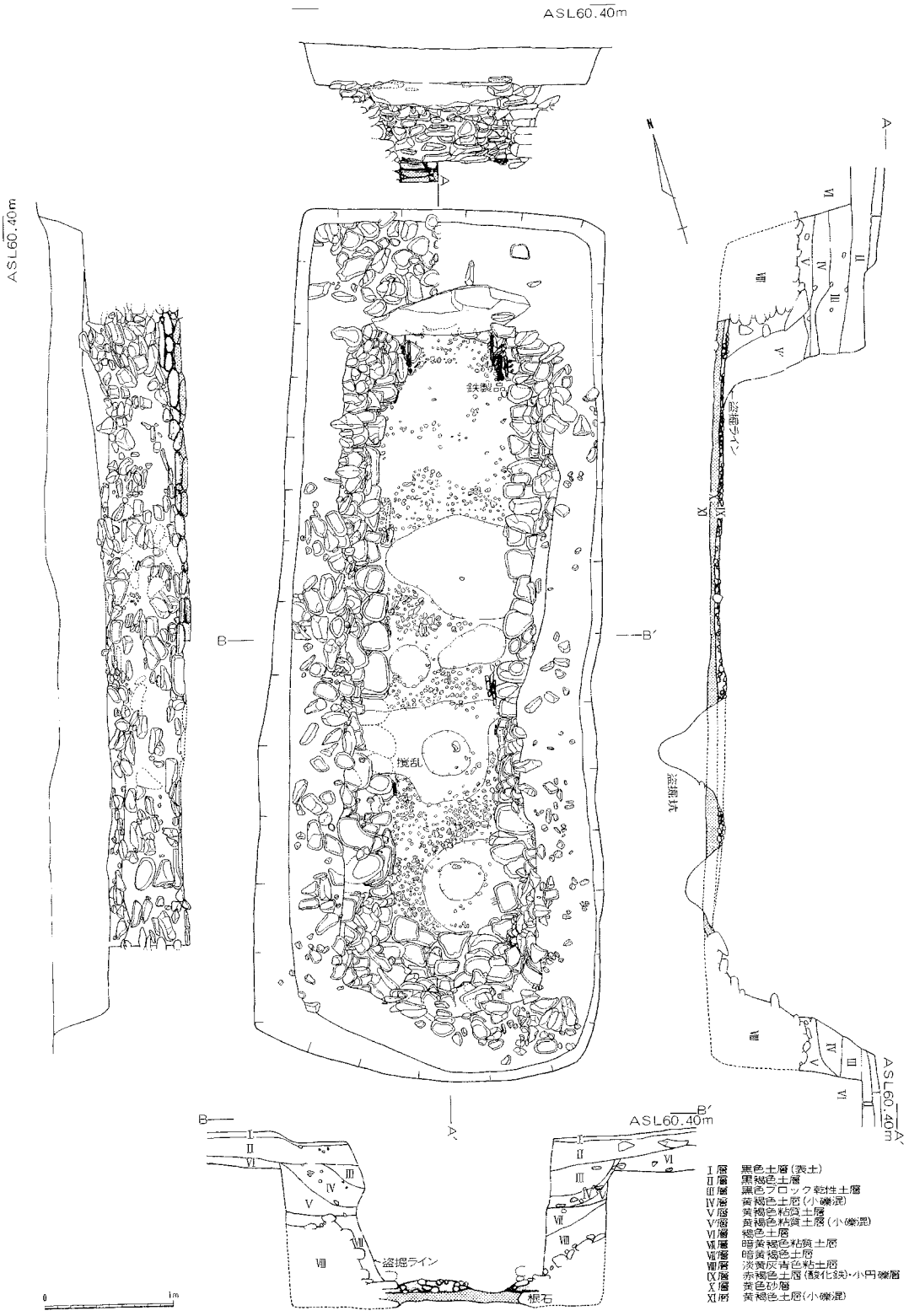
昭和49年に盗掘を受けた本墳の主体部は、当初より河原石積みの竪穴式石室であることが想定されていた。調査前墳頂部中央には長円形に窪みがあり、石室の位置及び盗掘規模がうかがえた。まず盗掘範囲と石室の残存状態を確認するため、5m×8mの範囲で表土を除去し、伴せて石室埋土、河原石等を排除し、石室軸線上と中央部でこれに直交する巾50cmのトレンチを2本設定し、掘り方と壁体の構造を追求した。その結果、盗掘は床面にまで達しており、壁体のかなりの部分を破壊し、また石室は北壁及び東壁の一部がわずかに原況を止めていたに過ぎなかった。天井石は計10枚が確認され、うち8枚が石室内に埋め戻され、1枚が北壁に接する形で原況を止めていた。埋土は多量の黄色粘土をブロック状に含む暗褐色土であり、多くの鉄製品の破片、石製模造品と勾玉2点をその中から採集した。

主体部の構造：主体部は河原石積みの竪穴式石室である。しかし、盗掘による破壊がひどく、その規模は推定せざるを得なかった。それでも全長は4.75m、巾は北壁で0.85m、中央部で0.84m、南壁で0.75mを計測し、南壁付近が若干狭いものの、ほぼ平面形は長方形をとることがわかった。石室高は、北壁の天井石が残存する部分で0.4m、東壁の側壁残存部で0.6mを測り、これは床面から壁体上面までの値と一致する。石室主軸はN16°Wをとる。

壁は、8～14段の比較的形の整った河原石を小口積みによって構築しており、他方、壁体内の河原石は円礫を含み形も不揃いで積み方も一定せず、その間隙にしっかりと粘土が充填されていた。また、側壁礫と壁体とは連続して築かれていることが看取できた。子細に観察すると、東側壁体中には礫の混入が少なく粘土を主体としているのに比べ、北・西・南側では掘り方までしっかりと礫を敷き込んでいることがわかった。

床面の構造：床面はほぼ水平に築かれており、小円礫が敷かれ、ベンガラが塗布されていた。特に盗掘による破壊が著しい北西及び南東部の床面を剥ぎ、側壁と床面の構造を掘り方上面まで追求した結果、床面のベンガラを塗布した礫敷き層（Ⅰ層）は、北壁で5cm、中央部で8cm、南壁で4cmを測り、南側が若干薄く敷かれていた。また東西縦断面の観察から、中央部が若干盛り上げられていることが判った。続くⅡ層は礫を全く含まない、木目細かい黄褐色砂層であり、掘り方面が南傾しているのに対し、この砂層をもって、南に厚く北に薄くその厚さを調整することにより、床面が水平を保持できるよう工夫されていた。掘り方上面が粘性の強い黄褐色土で固められていた点も考え合わせると、この床面の構造には、排水の問題が十分考慮されていたものと思われる。南壁に河原石が並べられている部分があったが、排水溝であるかどうかを確認するまでには至らなかった。

ここで側壁根石と床構造との関係を観察すると、掘り方面で側壁根石の並ぶところは、わずかに凹められ、安定が図られているようであり、また側壁1段から3段をⅡ層が被覆しており、先に述べた壁体と側壁とが間断なく構築されたことと合まって、床面をも並行して構築したことが


ASL60.40m
A
A′
B
B′
鉄製品
撹乱
盗掘ライン
盗掘坑
根石
I 層　黒色土層（表土）
II 層　黒褐色土層
III 層　黒色ブロック軟性土層
IV 層　黄褐色土層（小礫混）
V 層　黄褐色粘質土層
VI 層　褐色土層
VII 層　暗黄褐色粘質土層
VIII 層　暗黄褐色土層
VIII 層　淡黄灰青色粘土層
IX 層　赤褐色土層（酸化鉄）・小円礫層
X 層　黄色砂層
XI 層　黄褐色土層（小礫混）

第 6 図　主体部実測図

理解できた。

木棺は、その痕跡すら検出できなかったが床面の観察から、割竹形木棺の使用を推定することは難しく、むしろ箱式木棺の使用が想像できよう。

遺物：原況を止める遺物としては、北壁に接して床面直上より剣25口あまり、鉾1口が纏って出土し、東壁に接して刀2振りが出土した。また鉄製品の破片も床面に散在しており、さらに床面に金錆びの付着が数カ所にわたって観察でき、棺外埋納の様子も窺えた。

掘り方：全長6.95 m、最大巾2.73 m、深さ1.10 mを測る、ほぼ直方体をなすと思われる。壁体上面までは約0.7 mを測り、天井石を架設後、掘り方上面まで粘土と黒色土の互層による封土が認められた。さらにその上面を整地し、墳丘盛土が覆っていた。

Ⅳ. ま　と　め

今まで述べてきたように、地形測量・墳丘測量およびトレンチ発掘による墳丘調査を実施した結果、従来知られてきた事の再確認とともにいくつかの新たな事実が判明した。資料の整理が実施されていないので、不明確な部分が多いが、調査の成果を簡単に述べまとめにかえることにしたい。

(1) 古墳は前方後円墳であり全長66.4 m・後円部径51.2 mの後円部高さ6.5 m・前方部巾9.5 m・前方部高4.0 mの規模を持ったものであることが理解できた。

(2) 墳丘の一部は山地を削り出しているが、他は盛土で築かれている。後円部は中段にテラスを持ち、2段築成となっている。

(3) 墳丘には全面に葺石が敷かれており、上段端部および墳丘末端部には大形の礫を用いて区画してある。又上段の葺石には墳丘端部同様大形の礫によって縦方向の区画が施されている。

(4) 後円部および前方部の墳頂部には円筒埴輪が巡らされており、又後円部のテラスの外側にも円筒埴輪が並べられている。従って前方部に1段・後円部には2段の埴輪が巡っていることになる。

(5) 後円部墳頂にほぼ南北方向に円礫積の竪穴式石室が存在する。盗掘により石室はかなり激しく破壊されているが、石室規模の計測は可能であった。それによれば石室全長4.75 m幅は北壁寄りで0.85 m、南壁寄りで0.75 m、高さ0.6 mである。

(6) 石室の床面は小礫が敷いてあり、全面的に丹彩が施されている。又一部に盗掘をまぬがれた部分があり、剣・大刀・鉾等多量の鉄製品が出土した。昭和49年の盗掘の後採集された遺物と合せ、この地域でも最も多量の鉄製品を出土した古墳ということができる。遺物の整理が未完であり、詳細は不明であるが、短甲・大刀・剣・鉾・刀子・鉄鏃等の武器類が中心である。

(7) 古墳の立地あるいは遺物の組合せにより、この地域で最も古式の古墳と考えられる。又その規模・形態・立地等より原野谷川流域における首長墓の1つと考えることができる。

図版 I

周辺環境（航空写真）

図版Ⅱ

A　古墳遠景(東より)

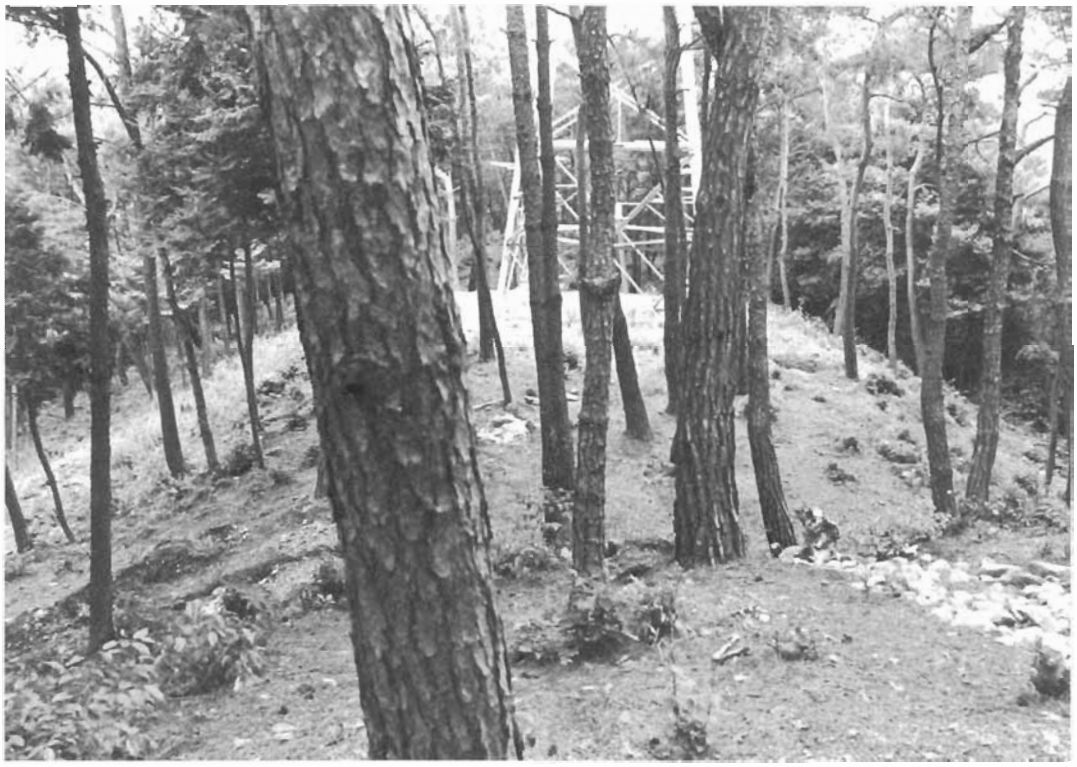
B　古墳遠景(西より)

A　墳丘（後円部）

B　墳丘（前方部より後円部）

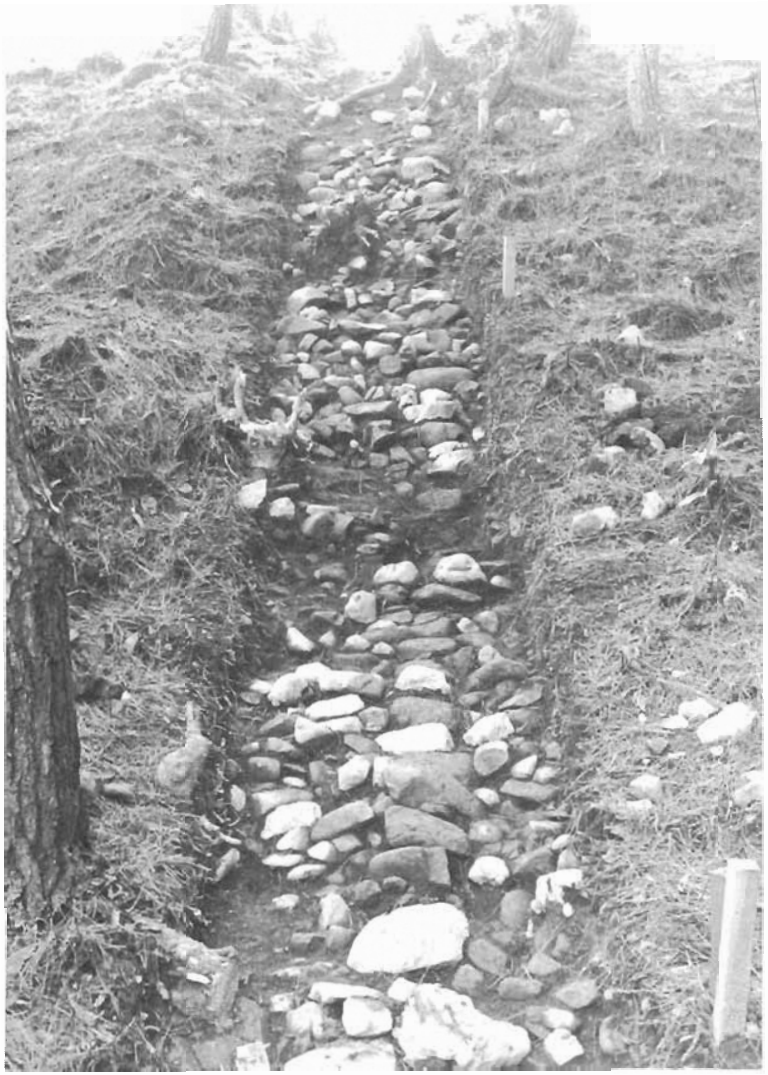
図版三

図版Ⅳ



A　墳丘（前方部）

B　後円部テラス



B　Cトレンチ

A　Bトレンチ

図版V

図版 VI

A　Fトレンチ

B　Gトレンチ

図版Ⅶ

A　Jトレンチ

B　Kトレンチ

図版Ⅷ

A　埴輪出土状態（Aトレンチ墳頂部）

B　埴輪出土状態（Aトレンチテラス）

図版Ⅸ

A　埴輪出土状態（Cトレンチ墳頂部）

B　埴輪出土状態（Eトレンチ墳頂部）

図版X

主体部(北より)

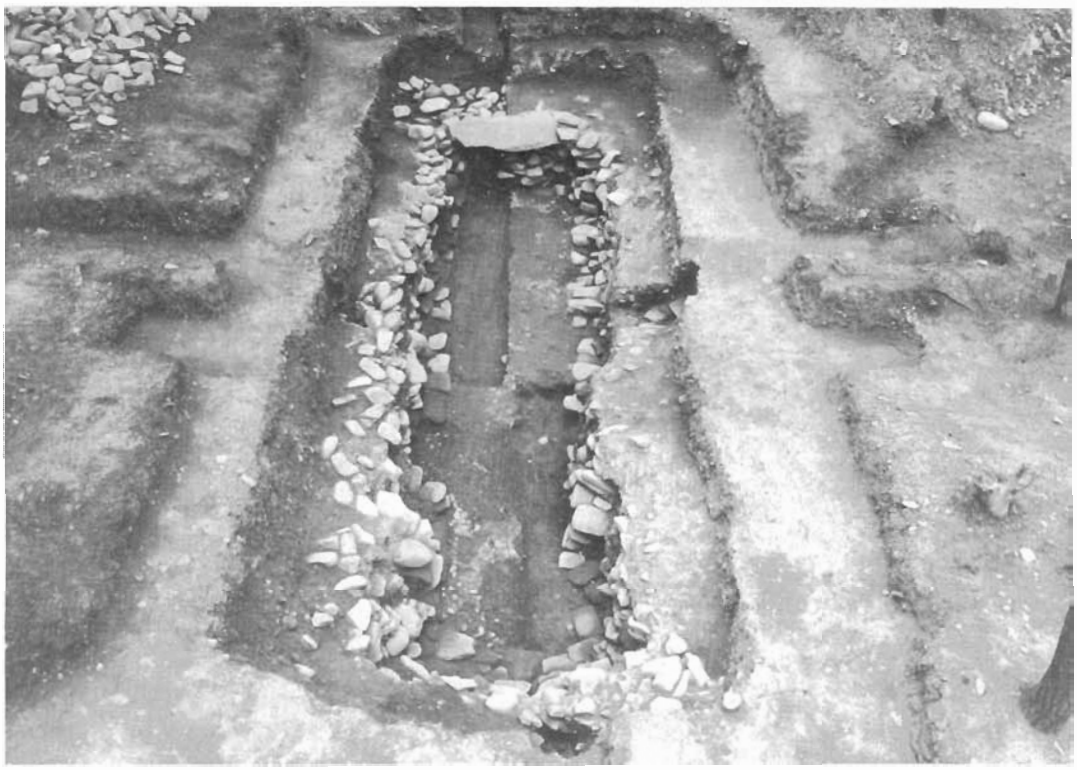
図版XI

A　主体部部分（北壁）

B　主体部部分（南壁）

図版XII

A　主体部部分（西壁）



B　主体部完掘状態

図版XIII

A　遺物出土状態

B　遺物出土状態

図版XIV

A　金塚1号墳

B　金塚2号墳

各和金塚古墳
測量調査報告書
昭和56年3月31日
編集　静岡県教育委員会
発行　掛川市教育委員会
印刷　株式会社　三　創
TEL（0542）82-4031